歴史街道を行く／峠シリーズ第13回
京都市／百井峠

源平合戦に敗れた源氏一族の「隠れ里」

百井峠（ももい）

京都の中心から鞍馬山に続く、鞍馬街道。
若狭から京都・奈良まで献上物が通った、若狭（鯖）街道。
名の知れた、その両街道の間を結ぶ街道に入ると、
標高738mの「百井峠」、そして、古書にも“山中の古村”
と記された平均標高620mの百井の里があります。
そこは、まだあまり知られていない源氏の
「隠れ里」と言われており、
行き交うハイカーたちの姿もあまり見ない地域です。
今回は、その伝説の由来の地を訪ねながら、
これまでの歴史と、現在のまちの課題に迫ります。

●平日も多くの人でにぎわう「鞍馬寺」

近江源氏が鞍馬から追われて入り、先祖となった百井の里

取材は、鞍馬街道ルートからスタートしました。鞍馬仏教の総本山として知られる鞍馬寺を左に見ながら、鞍馬川に沿って花脊方面に国道を北上。勾配は激しく、路線バスも一日数回しか通りません。花脊峠に向かう途中の分岐点、「百井別れ」に入ると風景が一変。看板類もなく、国道とは思えぬ険しく細い道に、ただ驚くばかりです。両側に林立する膨大な杉の木はどこまでも続き、空が狭く見えるから不思議です。杉峠と呼んでもおかしくないほど、圧倒的な杉の森です。

昔、京洛騒動の乱に源平合戦に破れた源氏の一族で近江の武士佐々木氏は、鞍馬より杉の峠を越えて茶屋谷に下り、杉の大木の元にて敵の攻めくることを立聞きしたと言ふ
（「百井開村の由来」より）

と言い伝えられているように、佐々木一族の落武者は、おそらくこの峠を抜け、川を伝い近江に逃げる途中、この古書に記された杉の大木に身を隠し、平家の追手から逃れたのでしょう。東の山をあと一つ越えれば近江という位置ですが、本当にここは京都市内だろうか?と疑うような風景の連続となっています。

●分岐点の「百井別れ」

●「鞍馬寺」を後に、百井峠へ

気づかずに、宿敵・平氏と同地域に居住していた佐々木一族

ところで、近江源氏である佐々木一族の登場は、平安末期とされています。伊豆に流されていた源頼朝が、平氏打倒のため挙兵した際に、佐々木五人兄弟（太郎定綱、次郎経高、三郎盛綱、四郎高綱、五郎義清）が揃って旗下に加わった時から始まります。文治元年（1185年）、平氏を滅ぼした源頼朝の鎌倉幕府体制が確立（1192年）し、嫡男の佐々木太郎定綱は、近江守護職に任ぜられ、以降、中世の近江の国は佐々木源氏とともにあったとされます。逃れてきた佐々木一族の詳細は明らかではありませんが、都で鳥を飼うのが流行した際、一族のある男が鳥を捕りにこの地を再訪し、稲穂を見つけ、豊かな土壌があると判断。田畑を開くために、家族を連れて移り住んだ者たちが最初の住人となりました。しかし、この大原の近くの別所には、隆盛を極めた多くの平氏らも、その後移り住んでいたと言われており、これらの伝承が事実とするならば、当時の人々は厳しく、険しい自然環境をも相手に闘っていたと想像できます。

「百井峠」の街道は、地場産業の薪や炭を運ぶ牛車道

見晴らしのいい山道にさしかかると、お地蔵さんが祀られている所がありました。少し先に赤い杭があり、そこに「百井峠終点」の文字が記されていました。“ここが百井峠か”と感慨に耽っていると、急に深い霧があたり一面ににたちこめ、たちまち幻想的な雰囲気に。遥か向こうに見おろしていた鞍馬辺りの風景も靄にすっぽり覆われました。驚く私たちの話し声に臆することなく、鶯は霧の中で美しい音色を響かせています。先出のお地蔵さんは「生津（しょうず）地蔵」と呼ばれ、以前はほぼ真下にあたる百井谷の田端に置かれていたもので、昭和10年に、牛車道から自動車道への拡幅工事の際に移転したものだそうです。険しい峠道にあって、昔から人々の安全を守り続けてきてくれたのでしょう。この街道は、古来より貴重な産業道でもありました。百井の主な産業は林業で、以前は黒木薪や火打ち石を都で商っていましたが、元禄の頃より整炭法が普及。炭を焼いては、鞍馬の問屋まで牛に荷を引かせて運んでいたとか。伐採した丸太を運ぶのも同様で、この街道と牛は貴重な役割を果たしていたのです。

●百井峠の「生津地蔵」

龍神女神と、楠木正成ゆかりの覚書に遭遇

峠を下り、人里が近づいてくると、大きな杉の丸太の鳥居が姿を現しました。峠同様の急勾配の石段を登ると、そこは「思子淵神社」の本殿です。秋には「湯上祭」が行われ、毎年、多くの秋の実りが御神饌として捧げられます。シコブチ神は、一般的には川の魔物を退治してくれる川の神様、筏の神様とされ、安曇川流域には、志古淵・志子淵・思古淵・子古淵・信興淵などの土着神の名で祀られている神社も数多くあります。山が険しいため、川は交通路として、あるいは林業のさかんな土地だけに、伐採した木で

●再建された「長慶寺」

筏を組み琵琶湖まで運ぶことに活用されてきました。しかし、百井の里の「思子淵神社」のご本尊にいらっしゃるのは、実は何と“龍神女神”。子安地蔵尊でもあり、住民には、わが子を思う母としての御神体・女神さまとしても定着しているのです。また、驚いたことにその右には、百井の里の台原の田の中から掘り起こして祀ったという毘沙門天さまが。ある夜突然、後光を放ったということで、一時は「長慶寺」に預けられており、明治になり一緒に祀るようになったと言われています。その他、山王権現（日吉社）と並び、すべての神さま、仏さまが、里の豊穣を見守っています。ただ、そうした創建時の資料は文化3年（1806年）の火災ですべて焼失してしまい、今は百井町の長老自らが筆を取り、この里の伝承記録を残し、語り継いでいます。

そして、再建され現存する「長慶寺」を訪れると、思わぬ事実に遭遇しました。それは、昭和29年に火事で消失した「長慶寺」を再建する際に発見された、大きな一枚板に記された記録でした。それによると、楠木正成の五男・源吾が室町時代に寺を再興した・・・と記述があります。知られざる歴史の舞台となっていた悠久の流れに、思いを馳せずにはいられません。板の痛み具合がひどかったため、現在は当時の神主さんが模写したものが大切に保管されています。

●“龍神女神”が祀られている「思子淵神社」

●「立ち聞きの杉」から見上げれば、百井峠（中央奥）が見える

遂に到達した「立ち聞きの杉」

集落から厳しい山道に入り、あの、佐々木一族の落武者が身を隠したという杉の大木の確認に向かいました。年に数度訪れるくらいという山道は、かすかに2tトラックのタイヤ跡が確認できるくらいで、路面、周囲はまるで秘境を思わせます。途中からは徒歩で、生い茂る雑草をかきわけ、遂に到達。伝説の「立ち聞きの杉」が目の前にありました。元々あった杉の木は、大人4人が両手を広げて囲めるほどの大きさだったそうですが、以前の地主が伐採してしまったと伝えられています。現在の杉の木は、その大きな切り株の根元から伸びてきたもので、樹齢80年以上。当時のスケールには及びませんが、それでも平安末期の伝説を醸し出すには十分なムードです。遥か山の方を見上げれば、あの「百井峠」のお地蔵さんの辺りが見えます。佐々木一族が、谷を下り、ここまで逃れてきたのか・・・と実感せずにはいられませんでした。

●佐々木一族が、平家から身を隠した「立ち聞きの杉」

意外と多い自然災害の歴史 地域の防災を考える

百井の夏は冷房いらず。真夏でも、最高28℃の日が年に一度あるかないかの涼しさです。しかし、冬は厳しい豪雪被害に悩まされてきました。最近の記録からも、大正、昭和に大雪の記録があります。また、意外に水害にも多く見舞われています。理由としては、かつて湿地帯だった琵琶湖付近の大地そのものが、膨大な水分を含んでいるためと思われます。大雨が降れば飽和状態になり、川が氾濫することも多かったようです。さらに、標高がかなり高いためか突発的に吹く大風にも悩まされてきました。家屋が密集していたため、大風は火災被害を広げてしまう要因にもなったのです。特に、お寺も焼失した昭和29年の大火事の時は、交通の便の悪さもあり、通報から約半日後に消防車が到着するほどで、無事だった家屋はわずか一戸のみ。その後の防災に対する大きな教訓となりました。

●秘境を思わせる山道

日本には、こうした防災の課題を抱えた地域がまだ数多く残っています。歴史の名所を、決して災害の名所にしない備えや、取り組みが必要です。この地を開拓した、遠い昔の先祖の近江源氏も、それを望んでいるのではないでしょうか。

参考資料:北部農林業地域振興協議会「ガイド ふるさと森都市」
財団法人 花脊森林文化財団「マップ ふるさと森都市」

取材協力:京都市左京区大原百井町　小嶋義次さん
京都市北部農業指導所